



趣旨

産業革命に端を発したモダニティの論理は21世紀に入った今、個人化を究極まで押し進めてきたように見える。これまで私たちが拠り所としてきた家族や共同体はすでに弱体化されてしまった。加えてグローバリゼーションの論理は国家までも無力化しているかのようである。この避けがたい社会変動を、社会学はいかに把握するか。グローバリゼーションの何をどのように課題とすべきなのか。どのような結論に向かっていけばよいのか。どのような処方箋を描くことができるのか。社会理論、東アジア、そして下層社会の観点からグローバリゼーションをめぐる社会学研究の進むべき道を考察していく。

趣旨説明

今田高俊（日本学術会議会員、東京工業大学教授）

講演

グローバルな空間と具体的な場所

伊豫谷登士翁（日本学術会議連携会員、一橋大学教授）

全球(グローバル)化という中国的(ローカルな)経験

園田茂人（日本学術会議連携会員、東京大学教授）

都市下層の世界から

青木秀男（社会理論・動態研究所所長）

コメンテーター

正村 俊之
（東北大学教授）
小井土 彰宏
（一橋大学教授）

コーディネーター

遠藤 薫
（日本学術会議連携会員、学習院大学教授）
樽本 英樹
（北海道大学准教授）

日本学術会議社会理論分科会 & 日本社会学会共催シンポジウム

グローバル化する世界 ——いま何を問うべきか

2010年11月7日（日）13時20分～16時50分
名古屋大学経済学部棟2階カンファレンス・ホール
参加費無料・事前申込不要